

tendency to early marriages is so strong that we want every possible help that we can get to counteract it; and a system which in any way whatever tends to weaken the foundation of private property, and to lessen in any degree the full advantage and superiority which each individual may derive from his prudence, must remove the only counteracting weight to the passion of love, that can be depended upon for any essential effect." (Malthus, Principle of Population, 2nd ed. p. 385) (傍線引用者)

記して以て再考の一資料たらしめ、重ねて懇切なる示教を與へらるゝ日を待つこととしたい。(十二・三)

福井孝治著

『經濟と社會』

手塚壽郎

現在の我國の理論經濟學に流れてゐる潮流は必ずし

福井孝治著「經濟と社會」(手塚)

も二三を以て計へ得べきわけのものではない。或ひは日本主義經濟學と銘うつものがあり、平衡論派の經濟學があり、實證主義派の經濟學があり、準新古典派經濟學があり、生活派經濟學がある。百花繚亂と咲き亂れて、其美しさを競つてゐる觀がある。然しそれらの諸々の經濟學の中で、この數年來、論難攻撃の鋒が頗る鋭く差し向けられてゐたのにも拘はらず、平衡論派の經濟學が際立つて其流を旺にしてゐる。高田博士の經濟學は獨特なものではあるけれども、此派の經濟學の流に可成の程度に掉してゐると解釋され得るであらうし、博士の門弟の多數が此派の流れを汲んでゐる。また中山博士は自他共に許すところの平衡論派のチャンピオンである。東大の理論經濟學を率ゆるであらうと豫想さるゝ安井氏もまたさうであらう。神戸商大の經濟學にも此學派の潮流が次第に浸入してゐるかのやうに見受けられる。

かやうな平衡論派の進出は、ひとり我國の現象であるに止まらない。英米佛の經濟學界に於ても同様である。誰かゞ現代に於ける理論經濟學のセンターとして指摘したケンブリッジ大學、ロンドン・スクール・オ

ブ・エコノミックス、ハーヴァード大學、シカゴ大學等に於ける支配的な理論經濟學は平衡論派のそれであると云つてよい。フランスでは、オープチャアントネリの如き平衡論者をもつてゐる。英米佛に平衡論派以外の學派が無いなど、私は云ふわけではないが、少くとも現在までのところ、此らの國々に於ては換言すればデモクラシーを標榜してゐる國々では、如何なる理由であるかは知らないが、此派の經濟學が經濟學の主流をなしてゐるやうに思ふ。

然し、一學派が非常な勢を以て支配的になつて來ると、自ら其對立物を生起せしめるものゝやうである。米國では制度派の經濟學が、佛蘭西では Petroux らのコルポラチズムが擡頭して、著しい勢力をもつて來てゐる。伊太利では近頃まで世界の他のどの國よりも平衡論派の經濟學が流行を極めてゐたのであり、獨逸では、また舊奧太利では、此派の經濟學が擡頭しかけてゐたのであるが、既に此らは凋落を明白に示してゐる。そして所謂政治經濟學が燎原の火の如くに廣い學界を風靡せんとしてゐる。

この伊獨の如く、我學界に於ても、旺盛なる平衡論

派の向を張つて、政治經濟學特に日本經濟學や生活經濟學が押し寄せて來た。そして此政治經濟學や日本經濟學はわが日本に特有なものを基礎として展開されるのは勿論であるが、同時にまた生活經濟論に大いなる據り所を借りてゐることも明白な事實である。換言すれば生活經濟學は實に、最近の經濟學並びに日本經濟學に、無くてはならない據り所を提供してゐるのである。宜なるかな、近來我國に於ては生活經濟學の進出が可成り目ざましいものがある。ゴットルの名は今や我國では相當に廣く學者や學生の口にのぼるやうになり、亦ゴットルの深い影響の下にあるやうになつた。ゴットルの深い影響の下にあるだらうと想像せられる私の學友だけを擧げて、宮田喜代藏氏、板垣與一氏、福井孝治氏などを始めとし、相當の數にのぼるであらう。そしてそれらの人々是我學界に於ける巨大な存在なのである。ゴットルの我國に於ける影響は、此らの學者の活動を通して、今や加速度的に増大して行くであらうと豫想される。

現在までのところ、我小樽高商にあつては、ゴットルの影響は教授にも學生にも多く現はれてゐないやう

である。既に福井教授の「生としての經濟」があり、また宮田教授の「生活經濟學の研究」があつて、極めて難解であるとせられるゴットルの經濟學を我々此方面の素養の無い者にも accessible なものにしてくれたのではあるが、どう云ふわけか我小樽高商の學生にはゴットルの心酔者が少いやうである。南教授、室谷教授の如く深い造詣をゴットル經濟學にもつてゐる教授も少くはないのであるが、たしかにゴットル心酔者は多くはない。私のこの福井孝治教授の新著の「經濟と社會」の紹介はかゝる本校の事情のうちに書かれるのであつて、從來私が書いて來た新刊紹介とは全く趣を異にする。凡そ批評ともなれば、批判者が批判される者と同様又は同様以上の力を有する場合にのみ、可能である。福井教授の新著の場合には、私はその内容の方面の素養を全然缺如する者であり、ゴットルの原著作なども全く不案内である。従つて此新著の批判などを試みようとするのではない。かつて私が書いてゐた新刊紹介には多少批判がましいことも含まれてゐたのであるが、今の場合にはかやうなものは微塵も含まれてゐない。此紹介の讀者の大多數は本校學生であらう

ことを豫期し且つ確信するので、此ら本校の讀者に此新著者の熟讀を慫慂する目的にのみ、この二三頁が書かれるのである。「經濟と社會」の著者は實に二十年にも近い歳月の間、ゴットルに沈潜せられる篤學の士であり、大阪商科大学の理論經濟學の講壇は氏の存在によつて異彩を放つものとなつてゐる。

氏はさきに「生としての經濟」を著はし、難解なるゴットル經濟學の全貌を、其批判的方面から建設的方面に亘るまで、最も巧に最も要を盡して紹介した。あれほど老大な、そして多方面なゴットルの諸述作を自家藥籠中のものとしての氏の紹介は充分に其價値を買はれてよいと思ふ。

ところで教授は、「生としての經濟」を公にせられる遙か以前から、ゴットルに則りながら、ゴットルを越えて、ゴットルの批判的なる展開をなせる論文を、大阪商科大学の機關誌を通して發表されてゐる。それらは集つて、ゴットルが取扱つた問題領域の全體に亘つてゐると云つてよい。「經濟と社會」はそれらの論文を集録せるものである。單純な論文集と異り、ゴットルが取扱つた問題領域の全部に亘つてゐるのである

から、結局「生としての經濟學」の展開と、その展開を越えた氏の批評的所信が、いとも嚴格にして緻密な論理を以て、叙べられてゐる。

叙べられてゐることの内容は、經濟生活構造問題、經濟的考量問題、價值及び貨幣問題、餘論として、學と實踐、ゴットルに於ける「受忍」の研究である。經濟生活構造問題の下では、(一)國民經濟と個別經濟、(二)ゲマインシャフト、ゲゼルシャフト及びウィルトシャフト、(三)經濟的空間が論ぜられ、經濟的考量問題では、(一)主として欲望が論ぜられ、價值及び貨幣問題では、(一)日常的思想と價值思想、(二)「價值」の生成、(三)計算と貨幣が論ぜられる。而して此らの論說の諸特長をば、著者自ら次のやうに指示してゐる。「少くとも現存の經濟學者の中、私の最も強い刺戟と影響とを受けたのはゴットルである。永い間、默殺と安價な批判とが、この特異な思索家に對して採られた學界の一般的态度であつた。このやうな不當な態度に對して、私はゴットルの徒と呼ばれることを喜んで承認する。だが、私は未だ嘗て彼を鵜呑みにした覚えはない。本書の主要内容をなす諸章は、却つて、彼の學說に對する批判と

もいはれ得るものである。即ち第一篇の第一章は、一方では經濟構成體と營利構成體とを峻別するにも拘らず、他方では「企業的營利の支配する大規模な流通經濟」の下に於いて經濟構成體としての國民經濟の成立を主張するところの、ゴットルの見解に對するプロテストであり、第二章は上記の問題と關聯しつつ、ゴットルの所謂共同生活の三つの部分構成に關する說を批判したものであり、第三章はゴットルが空間世界を専らその自然的構成に局限して論じてゐるのに對し、それをより具體的に自然と人工との統一として考察して見ようとしたのである。更に第三篇の第一及び第二章は、ゴットルの攻撃に對して價值論を擁護したものである。ゴットルの攻撃は主觀的價值說にとつては正に致命的である。若し人が彼の著書を読み且つ理解するだけの時間と努力とを惜しまないならば、必ずこのことを承認するに相違ない。だが客觀的價值說に對してはさうでない。英國ではベティに始りリカルドに終るといはれる古典學派の價值論は、ゴットルの鋭い批判にも拘らず、今なほ不朽の問題を藏するものである、と云ふのが私の確信である。」

ところで、これらのことからも、それ／＼の専門家から見たならば、相當廣汎な論議を誘起せずには置かないものであらう。既に斷つて置いたやうに、此紹介は單なるそして文字通りの紹介に過ぎないのであつて、批評がましいことを私は申す資格が全然ない。だが然し、これだけで済したのでは、如何にも御座なり紹介で、讀者たる學生が承知しないであらう。私自身の見解に多少關聯のある一二の點を述べて學生に對してのみ責を塞ぎたいと思ふ。

福井教授は、いま私が引用した箇所の中で、もしゴットルの主觀價值批判を読み且つ理解する努力を惜しまない人があるならば、必ずやこれが致命的批判であることを承認するであらうと、云はれる。そして古典派の價值論だけが——此理論に對するゴットルの批判には教授は承服せられない——妥當なものであるとせられる。かやうにせられる場合に、教授は、所謂價格論上のレアリズムを考への上に全然浮べられてゐないのではなからうかと思ふ。私は、實は教授がすゝめられてゐるやうなゴットルの主觀價值論批判を、讀む努力を未だなさない懶惰者なのであるが、もし此批判が

「經濟と社會」の二〇三頁以下のアモン、Heller及び Engländer 並びにリーフマンに對する批判を内容としてゐるものとすれば、古典派の價值論のほかにも、ゴットルの批判の鋭鋒を巧に免れ得べき價值論——價格論——があるのではなからうかと思ふ。それは即ち價格論上のレアリズムである。其最も徹底した姿のものは、クルノーの價值論であることは今更言ふまでもない。また最近に於ける *Econometrics* の價格論も其最も徹底した形態のものであることも、周知の如くである。此らレアリズムの價格論にあつては、價格の決定以前に、如何なる欲望があるかとか、欲望の強度があるとか、欲望の「スカラ」がどうのと云ふが如きことがらは一切問題にせられてゐない。市場に幾何の供給なり需要なりがある場合に、過去の價格は幾何であつたか、此全くレネレな現象のみが價格論の出發點である。かやうな價格論が今や最近の經濟學界に於ける支配的理論であるとすれば、ゴットルの批判の如きは死者に鞭打つてゐるのではなからうか。

然し經濟學プロパーな領域から踏み出で、ゴットルのやうな説明をなすことは各自の自由である。たゞ

かやうな説明は經濟學プロパーのそとにあるとは言ひ得るのである。加之此説明にしても二三三頁以下の説明の如きは、必ずしもゴットル張りの説明ではないのではないかと思ふ。伊太利の或意味で獨創的な一種の社會主義者 Graziadei が歴史的連續性なる名を以てなした説明の如きはゴットル張りの説明を相距る遠からざるものであり、タールドの説明もさうであつたのではないかと思はれる。

更にまた、徹底したレアリズムの價格論にまで至らなくとも、パレートを先驅者とするレアリズムの價格論に對してもゴットルの主觀價值論批判は全く無力である。パレートが無差別曲線を以て價格を説明したことは有名である。無差別曲線は、云ふまでもなく、欲望の動機や欲望の量的性質などに全然無關係である。如何なる動機から人が財について行動しようかと問ふ所ではない。單に無關心な財の組合せさへ考へられうればそれで足りるのである。而して此種のレアリズムの經濟學は今經濟學界に於ける大なる存在であるのではなからうか。どれだけ成功したかは別問題として、近來學界から異常な注意を向けられつゝある Slutsky の

諸論文や、Hicks の Value and Capital, 1939. はパレートの線に沿ふものであり、決して無視することの出来ぬ大いなる存在となりつゝある。

次に教授は、古典派の價值論を以て最も完璧な價值説とせられてゐる。其理由とせらるゝ所は、古典學派に於ける現實價格とノルマル價格の區別の存在にあるが如くである。げに、ノルマル價格の概念の存在によつて、價格判斷の云はゞ中心點が出来上ると云ふことが、推察するところ、此理由のまた基くところであるやうである。だが私をして言はしむれば、價格判斷の云はゞ中心點となるべき所謂概念的價格は實は概念的なものではなく、過去の價格、隣人の支拂つた價格等なのではなからうか。ノルマルな價格と云ふが如きものは、長い間の價格の catenement の後に現はれるのであつて、後になつて見れば、これが現實價格動搖の中心點をなし、平均的な價格であつたと云ふことが解つて来る。然し現實價格の成立過程に於て左様なものがあるのでは斷じてない。現實の價格成立過程に於て働くものは、過去の價格であり、隣人の價格であるに過ぎない。(オクメヴオ、本文四八〇頁、日本評論社、四〇〇)